

86企画一3

翁長直樹企画vol.1

「'82沖縄の夏」展 7月1日㊦—7月20日㊧(月曜休廊)

川平 恵造 山内 盛博 屋良 朝彦

GALLERY TAKUMI

風景・イメージ・視覚

翁長 直樹

風景を視る私たちの視線は、文化の体系に取り込まれており、それから逸脱して視ることは、困難である。私たちは長い年月をかけて、共有の視覚をつくり上げてきた。それは、今まで見たことのないものでも、知っているものに置きかえられ、体系の中に組み入れられていく歴史であった。例えばルネサンスが発見した遠近法は世界を統一的に捉えることであったが、やがて世界を図式化し、ミニチュア化する装置となった。それは世界を見る眼のモデルとなり、ほんものの眼にとって代わることになった。人々は遠近法を通じた世界を実の世界であると思うようになったのである。その後写真が遠近法の代わりをつとめることになった。そのことは視るという私的な営為が、いかにコード化され、生きた世界との直接的な接触から断たれてきたかのプロセスでもあった。

伝統的風景画が今日消失したのは、写真の出現もさることながら、描くべき現実—自然の喪失感を芸術家が抱いているからでもある。

風景画は19世紀ヨーロッパ特有の芸術創造であった。近代化の進展と共に社会環境の人工化によって、自然から隔離されているという意識が人々を自然に向かわせるようになったのである。19世紀の芸術家にとって、共同体からの逸脱と内面世界への急激な傾斜が、精神の内包する危機であった。とすれば20世紀の芸術家と、その内面においてほとんど変わらないわけである。今日私たちを取りまく状

況は、急激なテクノロジーとメディアの発達によって、ますます生の現実体験が得がなくなっている。それは記号化された風景とでも言うべきもので、そのことに無自覚では、制度としての風景を生々の風景と取り違えることも多々あるわけである。あるべき現実への不在感から、美術は自立的なものを目指して突然多様な展開を示していくわけだが、そのことは必然的であったのか、芸術全般に停滞が見える今日、もう一度再検証してみる必要がある。

さて沖縄における風景は、復帰を境に急激にその固有性を変えられてきた。あるいは自ら変えてきた。その後10余年経って、私たちはその風景に馴らされ、教育されていることに気が始めた。今やヤシ並木、高速道路、削り取られ、埋め立てられ平板化した海岸線ビーチ、ホテルなどが広告のイメージと共に私たちに「見られる」風景として定着し始めた。それは、暗いイメージの悲劇の島から脱皮して、マスメディアのつくり上げた南海のパラダイスというイメージへ限りなく近づくことである。私たちの視線はそのようなマスメディアの網の中で動き回っているのだ。

70年代後半、若い作家達が、それまでの沖縄における風景画の文脈と異った語彙で、「新しい風景画」とでも言うような、現在の沖縄の風景を描き始めた。今回展示される作家達がそうであるが、三氏に共通するところは、現実そのものに対して強い不信感があるか、あるいは現実を実体として考えていないこと。それ故実際の風景からでなく写真から描いていること、描かれた画面はクールで濁いた感じを与えることである。

川平恵造は常に社会との関りを意識しつつ自然と文明の関係を描

いてきた。広告イメージのようにさわやかで美しい海と青空に対比して、宙づりにされたブロックやブラインド、アルミサッシなど、無機的で文明を象徴するものが描かれる。その紋切型の異化効果は目を奪うものがある。しかし制度としての視ることにどれほど自覚的であるのか、これら当時の作品からは表われてこない。

屋良朝彦はmy space シリーズで日の当るコンクリート壁を画面いっぱいに克明に描き、その前面に、日常見かける物や影を配する。画面全体からは無機的なものを描いているにもかかわらず、叙情が

漂う。屋良の作品は閉ざされた空間から風景を視るという姿勢が感じられる。しかしイルージョンに傾きすぎる面が感じられる。

山内盛博はビルや電柱の影をモノトーンで描く。三氏の中で、山内は、モチーフにこだわらないこと、構成的であることにおいて異っている。Zoom upシリーズのあと山内は急激に様式を変えていく。

さて今回の企画展は、美術作品を通して、「視ること」を考えるために三人の若い作家の作品を展示した。同時に彼らの作品から、彼等が何を投げかけているか考えてみたい。



■翁長 直樹 プロフィール

1951年沖縄県志川市生まれ。コザに育つ。大阪教育大英語科入学、映画と放浪、中退。琉大美工科に籍を置き、映画研究会にて上映制作。東京で、アルバイトと放浪。2、3の大学で美術史の聴講、イコノロジーにふれる。帰郷。

川平 恵造 Keizo Kawahira

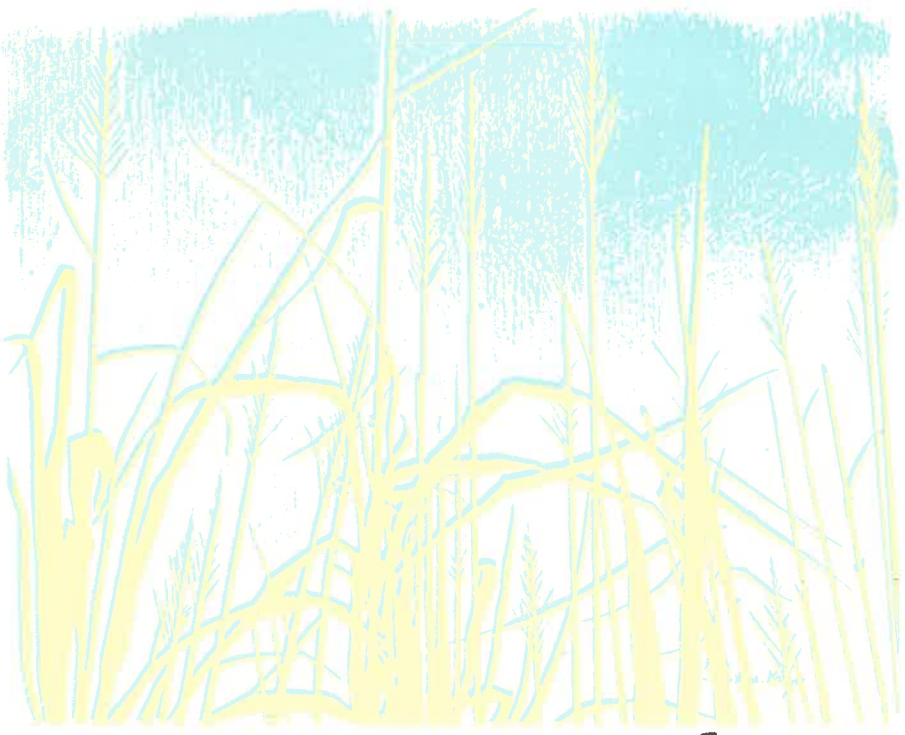
1949年沖縄那覇市に生まれる。72年琉球大学法文学部美術工芸科卒業。77年第20回新象展佳作賞受賞、準会員推挙。78年第7回県展奨励賞受賞。79年第22回新象展奨励賞受賞、会員推挙。第8回県展奨励賞受賞。81年第10回県展県知事賞受賞。82年第8回欧州美術国際展、カナダ美術賞展入選。現代日本絵画キューバ展招待出品。第11回県展奨励賞受賞。第9回スペイン美術賞展入選。第9回日仏現代美術展入選。83年第12回県展県知事賞受賞。84年第2回個展（新報第2ホール）。第13回県展無鑑査出品（以降毎年）。85年国際絵画パリ展出品。86年第3回個展（画廊ビジョン）。新象作家協会会員。日本国際美術家協会会員。85、86年県展審査員。

山内 盛博 Morihiro Yamauchi

1955年沖縄市に生まれる。79年琉球大学教育学部美術工芸科卒業。沖展、県展に入選、以降毎年出品。80年絵画2人展。スペース水曜展に2回出品。81年個展開催（国吉ギャラリー）。絵画6人展。82年カップコレクションに出品。個展開催（国吉ギャラリー）。第8回欧州美術国際展入選。第9回日仏現代美術展入選。沖縄新象新人8人展。新象展佳作賞受賞。83年物に介在する表面から（4人展）。84年沖展奨励賞受賞。個展開催（沖縄市中央公民館）。絵画の表現方法としての場所と内容展（4人展）。85年沖展奨励賞受賞。県展奨励賞受賞。86年沖展奨励賞受賞。個展開催（沖大市民ギャラリー）。

屋良 朝彦 Asahiko Yara

1953年那覇市に生まれる。76年琉球大学教育学部美術工芸科卒業。82年個展開催。県展、新象展初出品、以後毎年出品。83年スペイン美術賞展出品。新象展奨励賞受賞。日仏現代美術展クリティック賞受賞。84年安田火災美術財団奨励賞展にて新作秀作賞受賞。東郷青児美術館に作品収蔵。日仏現代美術展出品。県展教育長賞受賞。85年県展奨励賞受賞。日仏現代美術展出品。国際絵画パリ展出品。86年日仏現代美術展出品。その他、グループ展出品。現在、新象作家協会会員。

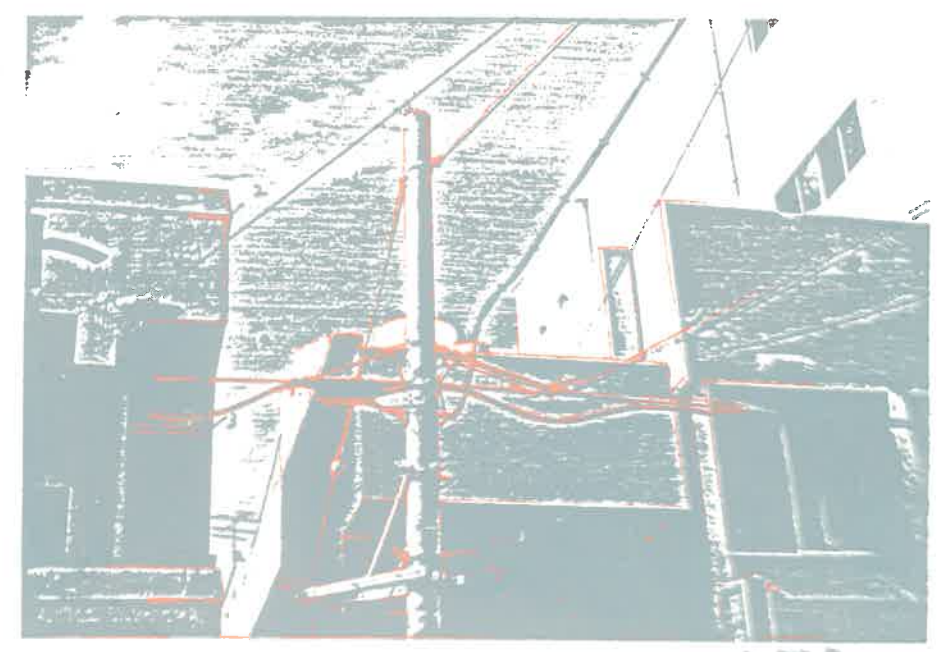


Kenjo, Kawahira



A. YARA

N. Onaga



M. YANAUCHI